

# 広報田村

令和2年度 第3号  
発行日 令和3年3月1日  
発行人 会長 有賀 仁一  
編集担当 三春方部

## 巻頭言

### 小学校英語を憂う

田村市教育委員会教育長 飯村 新市

年明け、極寒の朝、市内の子どもたちの登校状況を観察しながら、凍結した道を車で走っていると、いつも見る10人程度の小学生が集団でゆっくりと歩いている。さすがに今日は皆うつむき加減である。

零下10℃に迫る中であっても、学校に向かう子どもたちを見るにつけ、子どもたちのひたむきさに頭が下がる。昨日より今日、4月より3月、入学時より卒業時と体格ばかりでなく学力も精神面も確実に成長する子どもたち。ぜひ、一人ひとりのつまずきを肥やしに、掛け値なしに健やかな成長を促したい。

コロナ感染症拡大の影響で、学校行事も中止、規模縮小、延期等が考えられたが、市のイベントも同様の対応をとらせてもらった。今年度、セブ島での中学生語学研修が実施できなかったことは、残念であった。言葉としての英語を身に付けられる人材を育成する契機にしたいと強く思っている。外国の方と日常の簡単な会話を英語のできる中学生・高校生に育ててほしい、と思っている。

5・6年生で始まった教科としての英語、苦戦している先生方もいるのではないか。先進事例を研究して実践的な授業もみられる反面、今の授業が続けば、小学校段階で「英語嫌い」が出てしまう、と心配する声もある。多くの先生方は、大学の養成期間に英語の指導法を学んでいないことは承知している。そして突然の制度変更でもある。だからと言って、「英語嫌いを生み出してよい」ということはない。受験がなくならない以上、中学も(令和7年度から安積高校が中高一貫校になる)高校も大学も筆記試験には、文系はもちろん理系も必ず英語はある、という現実を避けて通れない。(数学や国語、ましてや理科や社会は選択できる)英語が苦手であると、進路選択も狭まってしまう。(私自身、そういう経験をしてきた。)

受験もそうだが、何よりも社会に出てからの「言葉としての英語ニーズ」は、さらに広がる。

これからグローバル化が当たり前前の社会、「生き

抜く」上で大きな武器、身に付けるべきツールになること請け合いです。

だとすれば、英語の授業をどうするか。5、6年の担任は当事者であるから否が応にも日々教材研究に苦労していると思う。中学校英語免許保有者を教科担任に、という話が出ているが、該当者が少ないし、養成もできていない。(そもそも教員志願者が激減している)とすれば、ぜひ校内で実践研究をしてほしい。これまでの経験や学んできたことを軸に不安や悩みをラウンドテーブル形式で、語り合ってもらいたい。「少しの関心と実践が少しの効果を生む」、3年から6年までの担任だけでなく、校内教員が一丸となって取り組んでほしい。今後、「英語があるから、高学年の担任を希望しない」ことにならないように。(今年度の研究物展を閲覧させていただいたが、英語教育をテーマにした実践がほとんどないのは、残念であった。)中学校の英語教員の経験や知見そしてアイデア等を参考にするのはよいと思う。20年以上ALTとコラボしてきた授業スタイル等は参考になるはずだ。(ここでは深く触れないが、中学校は、これまで以上に生徒の英会話力の定着について、重い責任がのしかかることは当然である。)

今年度市内中学校には、英語専門の教頭が数名配置されている。過日、中学校教頭が6年生に教科書の流れて授業を提供し、多くの小学校の先生方に参観いただいた。授業後質問攻めにあつたと聞いている。授業レベルで小学校教員から中学校教員へのアプローチは歓迎である。小中一貫のあるべき姿だと思う。

また、支援指導主事として、英語のエキスパートを配置している。いつでも授業支援に出向けるので活用してほしいと言ってきたが、苦戦していると思われる教員からの要請は少ないようだ。この辺りの意識改革は校長先生方をお願いしたい。

私のように大学を出ても日常の英会話ができない大人を少なくするため、まずはスタートの段階で「英語は嫌い」と意識されないよう少しの踏ん張りをお願いしたい。

## 学校で学ぶということ

田村市立大越小学校長 白石修子



「大越小学校」も創立9年目を迎えました。4月6日に新入学生を迎えて心新たにスタートし、新1年生からは、「勉強が楽しくなりました。」という

声が聞こえるほど、楽しく、充実したスタートでした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって「臨時休業」を余儀なくされ、少しの間足踏み状態となってしまいました。この中で、本校の教職員は、次に子どもたちを迎えるために、できないとあきらめるのではなく「できることを創る」という思いを共有し、準備を重ねました。

教育活動が再開されると、感染防止対策をしながら、できることを重ねてきました。下の写真は、玄関ロビーに掲げられた「希望の鯉ちゃん」の前でポーズをとる1年生たちです。「希望の鯉ちゃん」には、



一人一人のこれからの「めあて」が貼られており、子どもたち

の意欲の現れでした。

授業研究もすぐに開始でき、初任者研修も絡めながら教師の指導力向上にも取り組むことができました。

「授業づくり」を通して子どもたちの姿を語り合うことも、ICT活用につ



いて研修を深めることもでき、それによって、子どもたちの学ぶ姿も前向きなものとなったように思います。

短い夏休みを経て、学校行事も再開しました。

「授業参観」を皮切りに、「運動会」「校内マラソ

ン大会」など、全校生がともに活動できる場面が増えてきました。感染防止の対策をしながらも、運動会では、紅白の応援合戦の準備をしたり、校庭で「開閉会式」の練習をしたりするようになりました。自ずと下級生は上級生の様子を知り、上級生は下級生を意識し、気遣うようになりました。私は、この様子に「学校で学ぶ意義」のようなものを感じずにはられませんでした。

同じ空間で、お互いの姿に触れることで、上級生は下級生に伝えたいことができ、それを伝えようと工夫するようになります。また、下級生は、その姿に憧れ、「お手本」とするようになります。個々人が家庭にいたのではできない、この素敵な状況が「学校で学ぶということ」なのだと思います。

今年度は、登校できているからこそ、異学年の交流も多くできました。導入された「タブレット」の使い方を6年生が1年生に教える機会もありました。教師から指導を受けるのとは異なり、教える方の真剣さと優しさで、教わる方は一層真剣になっていました。そして6年生の凄さに



「憧れ」を持っていました。

委員会活動も、盛んになり「みんながハッピーな学校」に向かって、相手意識を持った企画がたくさん生まれ、参加する子どもたちはとても楽し



く過ごし、企画運営した子どもたちは、満足して活動を終えることができました。

頼もしい姿でした。

校長としては、まだまだ子どもたちの思いを十分に実現できていませんが、これからも子どもたちに寄り添った教育活動になるよう、教職員と知恵を出し合いながら推進して参りたいと思っております。

## へき地小規模校の良さを生かして

田村市立芦沢小学校長 御代田進一

今年度初めて小学校で勤務しています。文化の違いに戸惑いながらも、教職員に質問し、理解し、ちょっとだけアドバイスしながら取り組んでいます。



さて、今年度になり、初任者研修での講師をお願いされました。気乗りはしませんでした。再任用校長の仕事として、断ることもできず受けることにしました。芦沢小にて複式の授業の様子を参観し、その後に「へき地小規模校の教育」について話を予定でした。しばらくして、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため研修が中止という連絡が入りました。本校であれば3密は回避でき、問題ないのにと思いつつも安堵しました。

しかし、新採用教員にとって、毎日校内だけの生活や研修だけではストレスを抱えてしまうのではないかと、同じ悩みを持つ同期の仲間と気軽に話し合う機会が必要ではないかと、ということで、外に出かけての研修が復活し実施することとなりました。(予想通り意欲的に交流していました。)

その時に、へき地小規模校についてまとめたので、先生方は既にご承知かと思いますがいくつか紹介します。まず小規模校ですが、小規模校という規定はなく、学校教育法施行規則で12～18学級を標準的な学級数と規定されているので、それに満たない学校が小規模校に該当すると思います。すると、田村地区18小学校の13校が小規模校となってしまいます。

また、へき地校はへき地教育振興法により、駅、病院、高等学校、郵便局、金融機関、…、までの距離を点数化して指定しますが、この規定ほどの困難さはないが、教員の配置に苦慮する学校やその他の理由で教育事務所がへき地に指定する学校もあります。田村地区は7校がへき地校でしたが、滝根、大越、常葉が中学校に合わせることから、来年から田村市は船引と要田以外はへき地校となってしまいます。つまり、田村地区の小学校はほとんどへき地小規模校といえます。

本校はその最たるへき地小規模校で、3・4年、5・6年が複式学級で、全校児童37名の学校で、園児6名の芦沢幼稚園も併設されています。

芦沢地区は昭和の大合併まで他の村と合併することなくやっていけるくらい人口も多く、葉タバコ生産が盛んな村でした。村としてのまとまりがあり、文化や伝統を大事に受け継いでいます。新型コロナで「疫病退散」と若干脚光を浴びた「お人形様」は、かつて磐城街道の五人形（七里カ沢の五人形）といわれ五つの人形がありましたが、現在は、芦沢地区の朴橋と屋形、そして堀越地区（一時途切れ最近復活）の三つの人形だけが残っています。それぞれの決まりややり方で毎年きれいにお衣替えを行い、大切に受け継がれています。



また、信仰心も厚く、芦沢の鎮守白山比咩神社は、細やかな彫り物が施され、神楽殿も備えた立派な神社です。春祭りには、「八つ頭獅子舞」が奉納されています。明治、最初に芦沢小学校が開設された大昌寺は、現在建て替えられ、規模の大きさに驚かされました。

このような芦沢で、地域の方に愛され、支えられ、芦沢のシンボルとして丘の上に立つのが芦沢小学校です。毎日4回、カリヨンの鐘の音が地域に響きます(カリヨンは、朝は校歌、残りの3曲は季節ごとに変わり、4パターンかと思っていたら、12月だけクリスマスバージョンであることが最近明らかになりました)。このきれいな校舎で、素晴らしい環境の下、少人数の良さを最大限に生かし、教育活動を行っています。何事にも明るく、楽しく、まじめに、しっかり取り組む児童の姿に、温かな気持ちになったり、目頭を熱くする毎日です。

田村市では、小学校適正規模・適正配置検討委員会を設置し、旧船引町内の今後の在り方を検討しています。目の前の児童の姿を見ながら、どのような形がいいのか悩む日々ですが、与えられた



環境の中で最善を尽くし、児童、そして教職員のため頑張っています。

## 退職を迎えて

田村市立船引南小学校 先崎 力男

38年間の教職を終えて、間もなく退職します。月並みですが、教員生活の思い出などを綴って最後の「広報田村」の原稿とさせていただきます。

### 【夢見た教師像】

私たちが教職を目指して学んでいたころ、テレビドラマの水谷豊主演「熱中時代・教師編」が人気を博していました。ドラマの中の北野先生のごとく面白楽しい教師を夢見ていざ教壇に立つてみると、熱い思いは空回しするばかりで目の前の子どもたちには通じず、現実とのギャップを痛感した新任時代でした。

それでも経験とともに自信が持てるようになり、子どもたちと楽しく過ごした日々。退職を前にして思い出されるのは、良くも悪くも「古き良き時代」という言葉通りの子どもたちと一緒に過ごした担任当時のことばかりです。

テレビゲームが無かった時代、休日には釣り好きの男子たちと毎週のように釣りに行ったこと。

「創意の時間」を使って、今では考えられないような教科以外の活動を企画して取り組んだこと。（「ゆとり教育」に向かっていた時代で、学校の日課にも余裕があった）

5・6学年16名の複式学級を担任して、5年生の方が飲み込みが早くて悩んだこと。

荒れ気味だった6学年の担任を引継いで、苦労はあっても思い出に残る学級経営ができたこと。

子どもたちに学力をつけようと焦るあまり、宿題を出しすぎて保護者から苦情が来たこと。

課外活動でミニバスや陸上部を担当し、県大会優勝を目指して休日や夏休み返上で練習に打ち込んだこと。今なら超勤で問題になりそうですが、当時労苦を共にした「体育部の皆さん」（学校で何か雑務があると「体育部の皆さん」と声がかかりました）とは、今でも交流があります。

同世代の校長先生方は、皆さんそうだと思いますが、教員の年齢構成の関係で早々と担任を外れて教務や教頭になられた方が多いと思います。私も例外に漏れず、担任をしたのは10年ちょっとで、その後は担任外として「夢見た教師像」とは違った道を歩むことになりました。

### 【管理職になって意識したこと】

管理職としての勤務年数の方が長かった教職人生ですが、常々考えてきたことは、「学校の中心は担任」ということでした。子どもたちや保護者にとって先生と言えば担任です。その先生がいかにより良い授業・学級経営を行って、信頼を得るかで学校の評価は決まります。担任の先生が、最高のパフォーマンスを発揮するための支援や環境づくりを行うことが、与えられた自分の役目だと思ってきました。私の役割がどれだけの成果を得たかについては自信はありませんが、力量のある先生方に恵まれて、大きな問題を抱えることなく学校経営ができたのはこの上ない喜びです。

また、先生方が書く週案の反省などはしっかりと読み込み、ポイントとなる箇所にはアンダーラインを引いて返却し、書いてあったことを話題にしてコミュニケーションを図ることを心掛けました。次第にどの先生も朱書きの反省をびっしりと書き込んでくれるようになり、どんな授業・学級経営をしているのかや先生方の悩み等が読み取れるようになってきました。

校長となって全校集会などで子どもたちに話す際は、「小学生として分かってほしい知識」や「人として身に付けてほしいこと」などを伝えるためにテーマを持って話そうと決めて話をしました。例えば、年間を通して「日本の伝統」「世界から信頼されている日本」「日本に生れて幸せなこと」等の日本のすばらしさや豊かさを伝えることで、自分の国や故郷、ひいては自分自身に誇りを持って生きることに関心を持ってほしいと願って話しました。自己満足で、それらの話が子どもたちの成長にどれだけ役立ったかは未知数ですが、「子どもの前に立って心に響く話をしたい」という“教師魂”を持ち続けようとしてきました。

### 【おわりに】

震災やコロナ禍などの未曾有の災害に遭遇し、職務上の対応に逼迫された方も大勢いらっしゃる中、特別に大きな責務を負うことなく退職で幸運に恵まれました。（コロナ禍は進行中ですが）

大量採用時代で、同世代の多くの仲間と切磋琢磨したり、助け合ったりしたことが大きな支えとなってやってこれたのは言うまでもありません。

子どもの頑張る姿・純粋な気持ちに触れる度に、この職のありがたさを感じます。今まで出会えた子どもたちに心から感謝したいと思います。

## 「38年間の軌跡と思い出」

田村市立船引小学校 有賀 仁 一

まもなく定年を迎えるにあたり、この紙面をお借りして教職38年をふりかえり思い出の一部を記させていただきます。どうかご容赦ください。

昭和58年4月 白沢村立糠沢小学校 教諭

3月末甲野藤三郎教育長から「あんたは、剣道を指導してもらうために呼んだんだからがんばってない！」という電話をいただきました。これを真摯に受けて、毎週土曜日の午後はスポ少の剣道指導に専念しました。教師としての勉強と共に、地域に溶け込んで剣道に没頭した4年間でした。

昭和62年4月 郡山市立芳賀小学校 教諭

体育主任を任せられ、1000人を前にしての運動会の指揮・指導は快感でした。特設陸上・女子籠球・水泳を担当し、勝利をめざして熱く燃えていました。6年担任の時、陸上・水泳で2本の優勝旗を持ち帰った時は大いに盛り上がりました。

進んで授業研究を引き受けたり、徹夜で研究物をまとめたりしていたこの頃が懐かしいです。

平成3年4月 船引町立芦沢小学校 教諭

特設自転車部を任せられました。全く初めての指導経験でしたが、全国大会に2度出場してともに上位入賞、個人の部では日本一にも輝き、大いに沸きあがりました。担任を外れ教務主任、初任者指導や県教委の巡回面接教育相談員・町の指導員も任せられがんばりました。県の教職員研究物展に出品し、入選に入ったのもひとつの喜びでした。

平成7年4月 三春町立三春小学校 教諭

徐々に担任できた喜びと、学年主任として学年を取りまとめる楽しさを味わいました。しかしそれも束の間、文部省「教育課程一般」の研究指定を受け、担任を外れTT担当・研修主任・教務主任等として、先生方をリードし取りまとめる立場で奔走しました。地区の中心校において、学校運営のノウハウを大いに学ばせていただきました。

平成12年4月 古殿町立田口小学校 教頭

単身赴任4年間で3人の校長先生に仕えました。それぞれの意を体し、教頭として文科省の学力向上フロンティア事業を推進したり、地区の学校教育指導員や小体連・郡連Pの事務局を担当したりしました。地区の一体感を実感しながら、質の高い取り組みに勉強させていただきました。

平成16年4月 三春町教育委員会 指導主事

橋本弘教育長の下、「三春の教育」の具現化を図るとともに、学校を支える様々な教育行政を経験させていただき、本当に勉強になりました。

役場職員としての選挙業務や滝桜での交通整理等は、学校とは違う職場の体験で新鮮でした。町商工祭の湯豆腐大食い大会で優勝し、京都の全国大会で桂三枝とご一緒したのもいい思い出です。

平成19年4月 県教育庁教育振興領域管理主事

全く思いもしなかった人事でした。かつて県職員を受験し合格した思いから、その県職員という立場になった思いを話したところ、先輩方から笑われました。過酷で責任の重い業務であることをまだ実感できていない時でした。2年目、学校経営支援課に組織改編されました。定数担当でした。

平成21年4月 本宮市立岩根小学校 校長

これまでとは違った身の引き締まる思いを感じたのを覚えています。みずきヶ丘団地の廉価販売で児童数が急増する学校でした。3年間で100名の児童数増がありました。教育目標の見直しや特別支援学級の新設、2度の校舎改築・増築など、目まぐるしく勢いのある学校でした。ここで体験した東日本大震災は、生涯、忘れられません。

平成24年4月 県教育庁義務教育課 管理主事

再び県の教育行政に携わることになりました。主任管理主事、主幹、県北教育事務所長を務めさせていただきました。県の教育課題解決に向けて、組織的に取り組みました。磐越東線から乗り継いで4年間の新幹線通勤は貴重な経験です。

平成28年4月、小野町立小野新町小学校 校長

「きれいな学校づくりプロジェクト2016」と称し、PTAの協力も得て校舎すべてのガラスを磨いたり、物置の整理整頓・花壇の整備・草刈りをしたりして美しい学校環境づくりに取り組みました。町教委の支援も大きく、先生方のよさを生かした教育活動が存分に展開できました。

平成30年4月 田村市立船引小学校 校長

県内6番目の児童数を有する大規模校において、日々起こる様々な問題・課題に対応しながら、高い学力を維持し、充実した教育活動の展開に努めました。台風19号による浸水被害や校舎増築、新型コロナ対応等、様々ありましたが、教職員のチーム力でここまでくることができました。

これまでに出会いお世話になってきたすべての先輩・同僚・教職員・児童・保護者・地域の皆様方に心から感謝申し上げます。

## 地域を楽しむ

田村市立緑小学校 伊藤 昇

緑小学校に校長として赴任して3年がたちます。その間自分は何をやってきたのだろうと振り返ると、第一に思い浮かぶのは、この「移地区」での様々な子どもたちとの体験活動です。

「緑の少年団」の活動が続いており、そのバックアップをしてくれる指導員さんが多数おられて、サツマイモ栽培や木工クラフト、森林教室等、春から秋にかけて様々な活動が展開されてきました。中でもとても心強かったのは、地域コーディネーターの伊藤智広さんの存在です。伊藤さんは、毎日のように学校に顔を出してくれて、子どもたちと地域が元気になるよう活動のアイデアやいろいろな地域の話をしてくれました。

そうした中から、「移」を学ぶ地域学習としてこれまでの活動を整理し、構想してみようと考えようになりました。実際、教育課程に直接現れていなくとも、元々は、地域の豊かな素材を有効に学習に活用しようという意図はそれぞれの活動にあったはずなのです。その意図を読み取ることができないでいただけかもしれません。伊藤さんと話したり、子どもたちと活動したりすることで気づかされたということが本当かもしれません。先生方と「緑の活動」と「移の学習」を組み合わせ再度意義付けを行いました。

2年目、森林学習として地元の日山登山をし、移の歴史を地域の方々に話してもらい、特産物のエゴマ栽培に取り組みました。その活動を活動だけに終わらせることのないよう、学習発表会で劇にしたり、調理体験をしたりしました。この一連の学習活動の中で、子どもたちの学びが立ち現れるよう、いかに「這いまわる経験主義」に陥らないかを先生方と話し合いました。伊藤さんにも学習活動の目的を話して、なるべく沿うような形でコーディネートしていただきました。



移の歴史を劇にして発表

3年目の今年、コロナ禍の中でしたが、昨年以上に先生方からの発案を生かして、活動に取り組みました。森林教室では学校から見える移ヶ岳に登りました。また、学校近くの田んぼを借りて米作りに挑戦しました。秋には、田んぼで穫れた緑小産ひとめぼれと学校園で栽培したサツマイモでカレーと焼き芋を野外炊飯で調理し、収穫祭を行いました。2年目のエゴマ栽培もがんばって去年より2倍以上の収穫を上げました。そのエゴマは搾油して瓶詰にしました。移地域で行われてきたことを子どもたちが、地域の方々と一緒に活動体験することで生まれ育った「移」を感得できたものと考えています。それが、子どもたちの中で郷土を直に味わい、血肉となってくれることを願っています。取り組み方法にはまだまだ考えることや工夫が必要ですが、今後も受け継がれればいいなあ、と思います。

この3年を振り返りながら、やはり改めて思うことは、コーディネーターの伊藤さんと移地区について話してきたことが校長としての実践の一つのバックボーンになっていたと思います。移地区も少子高齢化が急速に進んでいます。毎年50人以上の人口減が続いています。こうした中で育つ子どもたちの将来を考えると、数年しか関われない「風の人」である私たちに今何ができるのか、考えずにはいられません。これまで営々と続けてきた地域を知り、地域のよさを掘り起こし、子どもたちと私たちが体験することを教育の基盤にすること。と難しく考えるより、私のこの3年間は「地域を楽しむ」の一言かもしれません。こうした思い出深い3年間となったのも田村地区の「ヒトモノコト」に触れることができたからだと思います。感謝です。



伊藤さん手作りのロケットストーブでカレーを煮込む

## 雑感「退職をむかえて」

三春町立中妻小学校 市川 潤一

### はじめに

これは、中妻小の校長室から見た風景である。3年間、毎日目にしてきた風景である。

校舎の前の庭、駐車場、そして道路を挟んだその先の少し低まったところに校庭がある。校舎前の庭は外部作業員さん



の手入れが行き届き、また校庭は雑草が生い茂ることなく、きれいに整地されている。体育主任や教頭、主査の先生方が定期的にトラックでレーキをひいて整備してくださっているからである。

毎朝、元気な「おはようございます」の挨拶とともに登校した子どもたちは、いつの頃からか校庭を走ることが習慣となっている。心身ともに健康な子どもたちは、6割以上の日が無欠席である。

先生方は、こどもたち一人一人を理解し、愛情を持って接している。子どもたちも先生方も、もちろん全員の名前を知っていて、本校では名札は用をなさない。学年を超えた活動を数多く設定し、上級生は自分の役割を自覚して活躍し、下級生はそんな上級生を見て育つ。年が移り、子どもたちが変わっても、この伝統は変わることがない。これも、学校が長年培ってきた文化であろう。

今、子どもたちの穏やかで自信に満ちた表情を見ると、長年の保護者、地域、先生方のご支援や努力の成果が現れていると、心から感じる今日この頃である。

### 3つの小規模校の思い出。

初任地の福島市立三河台小学校。先輩の先生方の素晴らしい指導、教育実践にふれ、自分の無力さに落胆ながらも、いずれ自分も先輩方のような教師になりたいと思った。

この学校も含め、退職までに9つの小学校にお世話になった。そのどれもが懐かしい思い出であるが、その間に勤務した3つの小規模校について思い出してみることにする。

2校目の郡山市立上伊豆島小学校。平成30年春に閉校。(その児童の約半数を後に教頭として勤務した学校で受け入れることになったのは、何かの縁であろう。)小規模校ではあったが、水泳や合奏に力を入れている学校であった。ひょんなことから、3年目から合奏部を担当することにな

り、それが、その後音楽の世界に関わることとなるきっかけとなった。同年代の同僚も多く、職員の輪が素晴らしい職場であった。何かと地域の人と接する機会が多く、学校を盛り上げていこうという気持ち、学校に期待する姿が強く感じられた。

7校目の福島市立中野小学校。二つの複式学級を持つ果樹地帯の中の学校であった。「中野地区は、全戸が110番の家」学校の前にはそんな看板が立っていた。地域の方たちが学校を、子どもたちを、とても大切にしてくれる学校だった。PTA実家庭が少ないにもかかわらず、毎年工夫を凝らした「ほたるのつどい」という夏祭り、数々の健全育成事業などを開催していた。会議では、PTAの会員が活発に意見を交わし、教頭である私は立ち会っているだけ。「子どもたちに楽しい思い出を」と一生懸命な姿が今も目に焼き付いている。この学校の運動会は、地区の運動会に学校が参加させてもらうスタイルだったが、「子どもたちが参加すると、地区の運動会が盛り上がる。これからもよろしく。」万事がそんな感じであった。地域と学校がWin-Winの関係なのである。

そして、最後の任地となった三春町立中妻小学校。2度目の三春町への勤務ということもあり、顔見知りの先生方が多く、町の様子のおおよそを知っていたことは心強かった。保護者の方々も協力的であり、地域の方は温かく学校を見守ってくださった。子どもたちは、とても素直で真面目に学習に取り組む子どもたちであった。本校も複式学級が2つになり、児童数は40人台となってしまったが、県と町から複式補正の非常勤講師の先生を配置していただき、複式であるが故の学習指導上の困難さはほぼ解消されている。特に町の小規模校への理解は本当にありがたい。

今思えば、どの学校も、保護者、地域、学校の結びつきが強く、子どもたちが生き生きしていた。

### おわりに

38年間という長い時間をかけて、多くの素晴らしい同僚と素直な子どもたちとの出会いの中で、自分も多少なりとも成長してこれたのかなと思う。長いようで、短い幸せな教員生活であった。数々の出会いに、心から感謝している。

